

鳥取県西伯郡伯耆町 (さいはくぐん ほうきちょう)

啓発から個別フォローまでの「一貫した導線」 ～医療・予防等につながるべき人をつなげる、地域ぐるみのアプローチ～

取材：2026年5月19日 伯耆町健康対策課

鳥取県西部の中心都市・米子市に隣接するベッドタウンであり、大山（だいせん）山麓の雄大な自然に恵まれたリゾート地でもある伯耆町。同町では長年、認知症や軽度認知障害（MCI）の早期発見・早期対応に取り組んできました。

令和4年度（2022年度）には、その基盤を生かした新たな認知症対策事業を開始。幅広い住民啓発から住民健診（集団健診）でのスクリーニング、精査に基づく医療・予防介入まで、一貫した流れを構築しています。初期段階で明確な全体像を確立したことで、課題や改善点が見えやすくなり、事業は継続的なアップデートを重ねてきました。令和8年度も新たな工夫を盛り込みながら、5年目となる実施に臨みます。

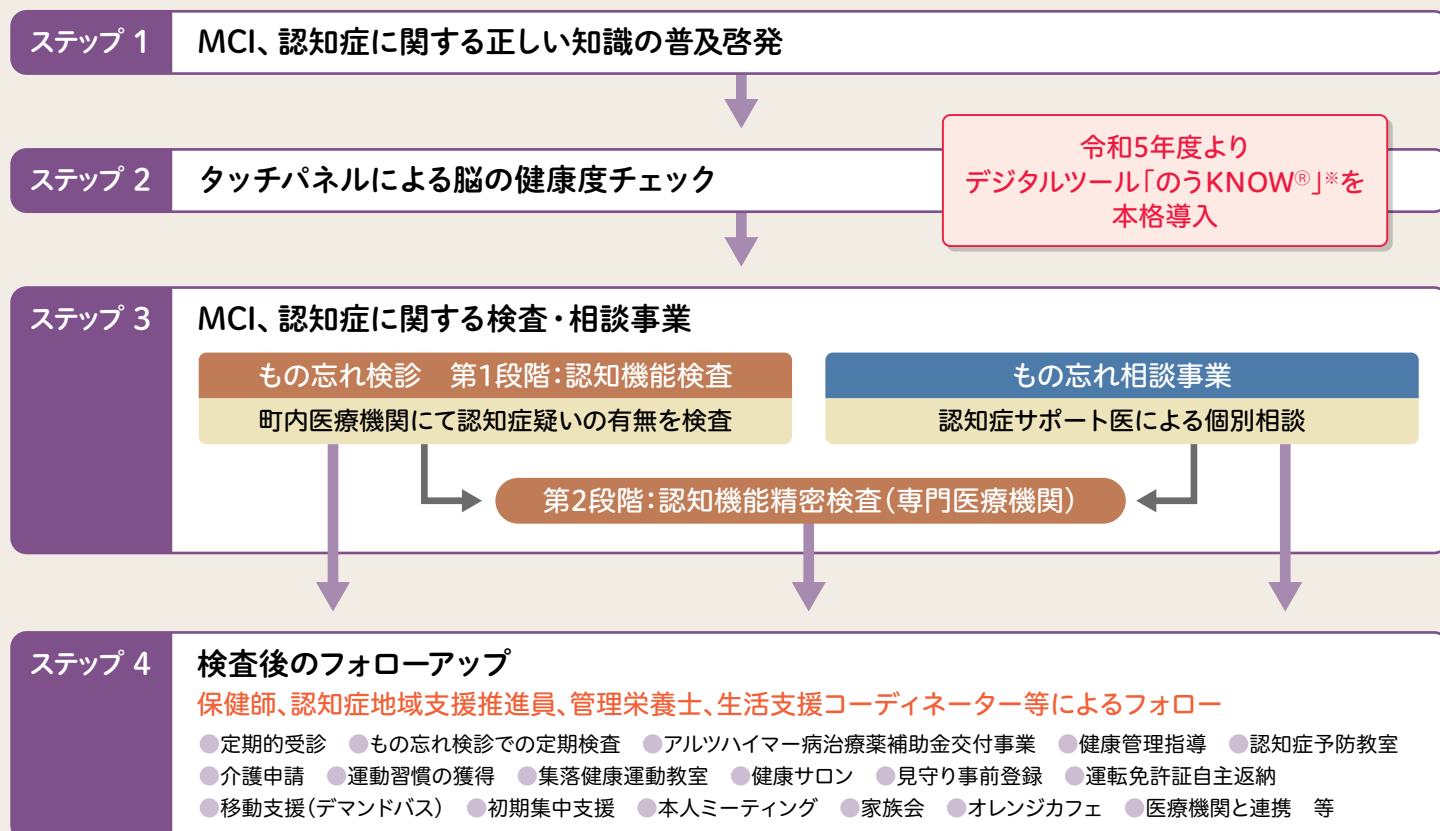


伯耆町 面積：約139.5km²、人口：10,051人（令和8年6月1日現在）

伯耆町より望む大山は、その均整のとれた山容から「伯耆富士」とも呼ばれ、町民の誇りとなっている。手前は伯耆町役場。

認知症対策事業 4ステップ構成の実施フロー

認知症、MCIへの正しい理解の普及をベースに、住民健診（集団健診）等での気軽な脳の健康度チェックに誘導。精密検査など適切なアセスメントの後、必要に応じて抗アミロイドβ抗体薬療法を含む治療や予防・生活支援に導く。



※「のうKNOW」は疾病の予防や診断を目的としたものではありません。

実施フロー事業の「注力ポイント」と「アップデート」

ステップ 2 タッチパネル「のうKNOW」による脳の健康度チェック

脳の健康度チェック

- 健診会場や集落、町事業、包括の窓口など、身近な場所で気軽に自分の脳の状態をチェック。
- 地域包括支援センター職員による丁寧な結果説明により、要フォロー者^注がもの忘れ検診(ステップ3)につながりやすい。

注)「のうKNOW」記憶力ランクBとCの方



有富 千帆さん
伯耆町 健康対策課 高齢者支援室
(伯耆地域包括支援センター)
室長/センター長

「私たちがどのようなところに出向いていけば、1人でも多くの方にチェックを受けていただけるのか、毎年度繰り返し検討を重ねています」

「のうKNOW」を用いた認知機能評価の実施状況(令和7年度)

検査実施の場所	実施人数	要フォロー者数	備考
住民健診	192人	42人	検診、体験教室等に案内
認知症予防教室(はつらつ教室)	71人	24人	年1回評価 7教室、本教室
集落健康運動教室(まめまめクラブ)など	29人	7人	立岩(まめまめクラブ)駅前(老人クラブ)検診、体験教室等に案内
役場窓口	1人	0人	はつらつ希望者
訪問先	2人	1人	検診案内、はつらつ教室参加
役場職員(町内在住管理職・会計年度職員)	84人	15人	自宅型試行として実施
計	379人	89人	

Update ↑

令和8年度～

「自宅型」脳の健康度チェックを追加(来場型との選択制)

～認知機能への気づきを、より多くの住民に～

- [自宅型] 希望者に二次元コードを郵送。スマホやタブレットで読み込み、好きな場所・時間にチェック可能。
- 20歳以上の町民全員に毎年配布する「けんしんパスポート」(その人が今年度に受診できるすべての健診・検診を記載)などで[自宅型]を案内。
- [来場型] 同様、伯耆町の「健康・まちづくりポイント制度」の対象事業(5ポイント贈呈)。10ポイント貯まると500円相当の町内施設等利用券と交換可能。

Update ↑

令和6年度～

「のうKNOW」サポーター(有償ボランティア)の立ち合い

～スムーズな検査実施と地域包括支援センターの活動を支援～

- 地域包括支援センター職員が結果説明やもの忘れ検診への案内に集中できる体制づくりに寄与。
- 健診や認知症予防教室などの現場で、住民目線に立った操作補助、不安軽減などを担う(令和7年度は8名が活動)。
- 認知症サポーター活躍の場の一環として活用。



有富 千帆さん

「チェックを受けられた方に、私たち地域包括支援センター職員がその場でいかにしっかりご説明できるかで、結果の受け止め方や検診等への関心が変わってきます。地域包括支援センター職員が本来担うべき説明・指導業務を、ボランティアのみなさんとの協働作業で実行しやすくなりました。

また、住民の方が事業の運営に携わることで、MCIや認知症への理解を深め、ご自身たちが正しい情報の発信役になられることも期待できます」

ステップ 3 認知症サポート医による『もの忘れ個別相談』

Update ↑

令和8年度～

「定期相談会」から「随時相談」に移行

～相談対応をよりタイムリーに～

- 公民館での定期的な相談会の開催から、随時申し込みを受け付ける形式に変更。自宅訪問も想定。
- 役場で日々対応している相談事例のなかで、特に専門的な支援が必要なケースについても、町内の認知症サポート医と連携して相談事業に乗せる。

ステップ 4

きめ細やかなフォローアップ

事後フォロー会議

- 多職種アプローチ**:約2カ月に1回開催。個別ケースの支援方針について多職種(保健師、認知症地域支援推進員、管理栄養士、生活支援コーディネーター)で協議。
- 継続支援**:対応後は事後フォロー会議で報告し、継続的な支援を行う。



フォローの要点

- 個別訪問**:対象者を個別に訪問し、保健指導や介護予防事業の紹介等を行うほか、必要に応じてかかりつけ医との連絡調整を図る。
- 全受診者の状況・経過を把握**:認知症、MCI、非該当者を含め受診者全体の情報を把握し、継続的な関わりを築く。



有富 千帆さん

「精密検査を受けられた方に、医療費の償還払いについてご案内するなど、事後フォローは町の制度を周知する貴重な機会でもあります」



川本 洸さん

伯耆町 健康対策課 高齢者支援室
(伯耆地域包括支援センター) 保健師

「検査の結果を受け不安になっている方もいらっしゃるでしょう。町からお声がけし、今後のことを一緒に考えさせていただくことで、安心につながればと思います」

医療連携体制の構築

- 町内全医療機関が参画**:町内に5つある医療機関のすべてがもの忘れ検診を担当している。
- 顔の見える関係づくり**:毎年度の事業開始にあたり町内医療機関との意見交換会を開催。前年度の結果を共有し、当年度の事業内容や方向性について話し合う。



Update ↑

令和6年度～

鳥取県との連動によりアルツハイマー病治療費を助成(伯耆町アルツハイマー病治療薬補助金交付事業)
～早期検査・治療に伴う生活負担を軽減～

- 抗アミロイドβ抗体薬の保険診療が可能になったことを受け、早期検査および治療費を助成。
- 費用負担は鳥取県1/2、市町村1/2。
- 最大40万円(生涯1回)。所得に応じて上限額を決定。



川本 洸さん

「MCIや軽度認知症の段階であれば抗体薬治療という選択肢もあること、費用面での補助が受けられることをお伝えすることが、事業への関心を高める要素の一つになっています」



有富 千帆さん

「抗体薬治療が実際どういうものなのか役場に尋ねに来られる方もいますし、病院で補助制度の説明を聞いたあとに確認に来られる方もいます。身近な相談先であることに加え、その方の所得区分を把握のうえ補助金(上限額)のご説明ができるのも行政ならではのといえるでしょう」

専門医療機関(町外紹介先)との連携も進展

行政と町内医療機関による意見交換会に、令和7年度は鳥取大学医学部附属病院の認知症専門医も参加。抗アミロイドβ抗体薬治療の現状をレクチャーし、「もの忘れが気になる患者さんはぜひ紹介してください」と呼びかけた。



有富 千帆さん

「町内の先生方は、大学病院を含め専門医療機関に躊躇なく紹介できるという安心感をもたれたのではないのでしょうか。新規治療薬の導入を機に医療連携もさらに深まっています」

令和7年度の実績

脳の健康度チェック

「のうKNOW」注)

実施

379名



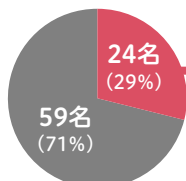
注)「のうKNOW」は疾病の予防や診断を目的としたものではありません。

もの忘れ検診

第1段階

認知機能検査

認知症の疑いあり



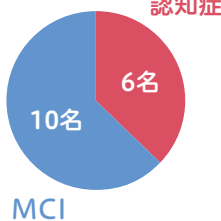
認知症の疑いなし

うち16名が専門医療機関を受診

第2段階

認知機能精密検査

異常なし:0名



伯耆町 アルツハイマー病治療薬 補助金交付事業

申請件数:9件



もの忘れ検診から
治療開始に至った
件数:4名



川本 洸さん

「もの忘れ検診の該当で未受診の方については、折に触れ生活状況をお聞きする、町の事業への参加をお勧めする、タイミングをみてあらためて検診にご案内する、などフォローを継続しています」

普及啓発活動(ステップ1)の重要性をあらためて実感しています



有富 千帆さん

「事業を通じて、医療や支援につながるべき方が適切につながっているという手応えを感じています。医療機関の先生方とのもの忘れ検診を続けてきて正解でした。この町ならではの、先生方との親密な連携の賜物です。」

その医療への流れの起点となっているのが、認知症に関する普及啓発活動です。正しい知識が広がることで、脳の健康度チェックやもの忘れ検診を受けてみようと思う方が増えていくのだと思います。

この町では20年以上にわたり、現在というMCI相当も含め、認知症の啓発活動に取り組んできました。アルツハイマー病の抗体薬が使えるようになった今、あらためて、そうした地道な取り組みの重要性を実感しています。

認知症への対応は、誰もが安心して暮らし続けられる地域づくりにつながります。地域のみなさんが伯耆町に暮らして良かったと誇りに思えるよう、今後も事業の周知と充実に努めていきます」

認知症に関する情報紙『オレンジガイド』の発行



編集担当: 保健師/認知症地域支援推進員/生活支援コーディネーター
作業療法士/管理栄養士/言語聴覚士等(随時)

伯耆町では令和8年度、高齢者施策の重要性が増しているとの認識から、高齢者支援室の職員を拡充しました。認知症対策事業においても、その意義が共有されることで庁内の推進力が高まり、より良い住民サービスや市民貢献につながっています。



鳥取県西伯郡伯耆町 健康対策課

高齢者支援室(伯耆地域包括支援センター)のみなさん

前列左から

多久和 由恵さん(主幹保健師)

有富 千帆さん(室長/センター長)

磯江 絵夢さん(認知症地域支援推進員)

後列左から

川本 洸さん(保健師)

本田 典子さん(生活支援コーディネーター)

城所 恵里さん(保健師)